

卓 話： 「ふるさとの川・五十嵐川への願い」 三条小学校 鈴木正尚さん



1. はじめに

三条小学校では鮭の稚魚放流を生活科の学習の中に位置づけています。3年前より2年生全員で、五十嵐漁協の皆様にご迷惑をおかけしながら、採卵・稚魚の飼育・放流等のお話を伺ったり、川に出かけたりして、学習を積み重ねてきました。

ここで子ども達は、生命の尊重、ふるさとの川・五十嵐川、五十嵐川にすむ魚、魚の生態等を学習し、動物を愛護する心情やふるさとの川の様子について気付いていきます。

今年も、北ロータリーの皆様のおかげで三条小学校では2年生66名で鮭の稚魚放流を行うことができます。これは、子ども達にとって忘れがたいものであり、貴重な体験をさせていただく企画に対して感謝いたしております。

2. 学習の中で子ども達は

鮭は一般的に放流してから4年目に成魚になって、ふるさとの川に戻ってくるといわれます。2年生の時放流した鮭は、6年生の卒業の年の秋、戻ってくることになります。3年前の学級担任と子ども達との会話の中で次のようなことが思い出に残っています。

「この鮭の稚魚は、4年後に戻ってきますよ。」

「あなたたちは、ちょうど6年生になりますね。」

「卒業の時に、あなたたちと一緒に、また鮭に逢いましょうね。」

というような会話をしていたと思います。この担任は、その年の3月をもって退職されましたから、4年後に戻ってくる鮭と4年後にいま担任している子ども達の卒業ということが重なりあって、このような会話になったものと思います。

さて、2年生の五十嵐川での学習では、

一魚とりをし、飼育活動や水族館作りをすることを通して、秋から冬の五十嵐川に住む魚について、親しみを増していくこと一

をめあてにして活動や学習を深めていきます。もう一つ、国語で「さけが大きくなるまで」という学習があります。ここでは、さけの誕生・成長（海での回遊）・そして産卵という鮭の一生について説明文を使った学習を行ないます。この学習と関連づけて、五十嵐川漁協の方々より、鮭の稚魚をもらい水族館の魚の仲間入りをさせたり、お話を伺うことを通して、飼育方法を研究したりします。もちろん、子ども達だけで、鮭を放流する大きさまで飼育することは至難の技です。でも、子ども達は、精一杯努力して「大きくしたいな」「放流まで生きていてくれないかな」という願いをこめて飼育しています。餌をあげたり、冬の冷たい水を換えてやったりと、2年生なりに努力しています。しかし、1匹減り、2匹減りというように、放流する時期までに元気な稚魚は数えるほど

しか残りません。そこで、再び漁協の方々のお世話になり稚魚をわけていただいて放流しています。

右の写真が放流の時の様子をうつしたものです。この写真では、全員川岸で放流しています。これでは、なかなか生きてくれないのかもしれませんが、子ども達なりに一生懸命なのです。再びふるさとの川・五十嵐川に戻ってくる確立は1/2000くらいといわれていますから、彼らの放流数からすると1匹でしょうか。でも、全部戻ってくると思いながら、また願いをこめながら行っています。漁協の方で放流する数から比べると微々たるものですが、秋に戻ってきた鮭を見つけたりする時も気持ちや、戻って来ていないかなと、岸や欄干より川をのぞいている時にもつ気持ちを大切にしたいと考え、毎年この学習を続けています。

3. ふるさとの川・五十嵐川への思い

では、これらの地動を通して子ども達はどのような感想をもつのでしょうか。次に子ども達の作文を載せておきます。

○ さけはよろこんでいたようです。川へ行っても、さけはすごくはやかっただす。 Y君

○ ぼくは、一ぴきでもいいから、ぶじにまたここにもどってきてほしいと思いながら、ほうりゅうしました。 K君

○ さけを川のところで、そっとはなしたら、さけが石のところにかくれました。 Mさん

○ なかよしルームに海の水をはこんできて、水そうに入れると、このまま生きていられるかもしれないのにと、思いました。 Aさん

また、鮭の飼育をしてみて2年生のI君はこんな作文を残してくれました。

「さけの赤ちゃんがおよいだ」

2月17日、学校の帰りになかよしルームにさけの赤ちゃんを見にいきました。5、6ぴき、ちがう水そうに入っていました。いっぱいいる水そうのほうは、まだあつまってばかりいました。

さけの赤ちゃんは、体のところがひかっていました。ぼくは、どうしてなのかなと思いました。さけの体のところに線がついていました。すいすいとおよいでいました。スーイと上がったりするさけもありました。それは、一ぴきだけでした。

ぼくはさけを見て

「気もちよさそうだな」と思いました。でも、しんでいたのもいました。10ぴきぐらいで石の下に頭をつっこんであるのもいました。じゃりのところにいるのもいました。のんびりやさんもありました。

水かえをして帰りました。

そして、I教諭は次のような感想を述べています。

ふるさとの川である五十嵐川での魚中心の活動は、子ども達にとって魅力があり意欲をもって取り組むことができる活動であった。川の中に姿が見えるがなかなかとれない魚とりでは、どうした